

信 毎 俳 壇

坊城 俊樹 選

墨国にオーレのこだま青嵐

いちわるはいつの世もありさくらんぼ

ほどほどの老の願や星の恋

腹の子のつつと動く小暑かな

壁の蚊に視線停めて狙ふ猫

時を待ち風も待ちたる巢立ち鳥

古井戸の記憶さまざま濃紫陽花

朴散華木曾義仲の墓所の空

滴れる水にふれては糸とんぼ

哭く海の声響けり沖漣忌

佳作

独唱は如雨露の陰や雨蛙

掲げ板夏祭の字はねてをり

(千曲市) 高野 郁子

(飯綱町) 小林 紀子

(松本市) 中村 百仙

(佐久市) 赤岡 厚子

(長野市) 清水美佐子

(安曇野市) 丸山 進也

(佐久市) 佐藤 勝子

(長野市) 栗津原吉弘

(南相木村) 猿谷 秀

(中野市) 芋川 菊水

(飯田市) 吉沢 奨

(長野市) 宮島佐代子

い出は何個食べたとか食べないとか、喧嘩するのはいつの世も不変。三句目、「星の恋」は七夕の傍題。老いた身にはもうそんな大層な願いは無い。「ほどほど」と言うところに人生の深さを見た。

一句目、「墨国」はメキシコのこと。サッカーのワールドカップの場面か。「オーレ」と応援する歓声もあたかも青嵐となる。二句目、「さくらんぼ」とは子どものおやつ。それを食べた時の思

選評

今井 聖 選

短夜のどこどこを眠りけり

行進の兵士はすべてサングラス

晩学は遺書の如くに五月蘭

教室は一斉に挙手燕の巢

登庁せり年代物のかりゆしで

青梅や西より雨の近づきて

冷奴正面に置き一人酒

立葵今年も咲けり草捨て場

牡蠣殻にかぶりつきたる蛸牛かな

台風は去りぬ野菜は腰伸ばし

佳作

産土の風を板間に三尺寝

饅食ふや見合下見の料理店

(須坂市) 丸山 英子

(長野市) 宮沢 信博

(須坂市) 富田 孝弘

(上田市) 田名網 剛

(松本市) 塩原 弥生

(下諏訪町) 長田多美恵

(松川村) 岡 豊村

(飯綱町) 坂井 寿男

(須坂市) 東島賀代子

(長野市) 山田登志夫

(長野市) 荻原 宏祐

(中野市) 石田 一石

る不気味さ。三句目、晩年の「学び」は遺書のようだとされていてと納得。金も知識も墓まで持っていけない。四句目、挙手の手と燕の子の首が重なって見えてくる。隠喩の句である。

一句目、夏の夜の短さを逆手にとってその短さの中にも「長さ」が存在すると詠んだ。「ところどころ」が発想の要である。二句目、実景ではないだろう。幻想の句。兵士の隊列が全員眼を隠してい

選評

神野 紗希 選

再会のグラスに合歡の花の影

黄金虫ルイボスティーに落せり

アトランティスの記録媒体なる海月

朝採りやレタスに滲む白き乳

どの青田ともなく風の立ちにけり

沐浴の赤子のにほひ日の盛

そつげなく水母が好きといふをんな

さみだるるこころでも同意させらるる

草刈りのエンジン噴出す梅雨晴れ間

木曾谷の奥の奥まで緑濃し

佳作

帰り来し父の背広に蜜三つ

徐行して蔵目で追う山路かな

(長野市) 南郷 修二

(長野市) 宮沢 信博

(小諸市) 加藤 陽介

(南牧村) 吉沢 永子

(長野市) 松本 宏要

(佐久市) 佐藤 勝子

(伊那市) 鈴木 秀雄

(池田町) 南 たかし

(飯田市) 原 哲夫

(上松町) 堀川 悦子

(箕輪町) 佐々木京子

(岡谷市) 大沢 誠

く飛沫を立てる。三句目、海に沈んだ文明を、海月たちはその体内に記憶しているのだとしたら。海の昏さに古代がいきいきと光り出す。四句目、確かな描写がレタスの新鮮さを伝えてくれて嬉しい。

一句目、合歡の花の影の繊細な柔らかさが、涼しく再会を彩る。花びらの桃色もほのぼのと歓びを物語る。二句目、テラスなどの開放的な空間か。黄金虫とルイボスティーの予期せぬ衝突が、夏らし

選評